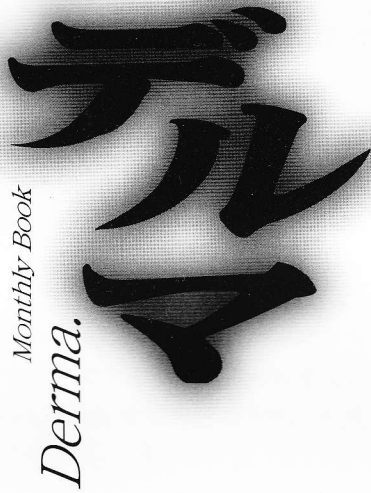


Monthly Book
Derma.



ISSN 1343-0831
文献略称 MB Derma.

No.113 別刷

ジェネリック・ガイド

2006年5月15日発行

株式会社 全日本病院出版会

コメント

ジェネリック医薬品を考える

かさまつ皮膚科 笠松正憲*
大野皮膚科医院 大野盛秀**

開業後、ジェネリック医薬品(ジ剤と略す)を利用し始めた理由は、①薬価差益が大きい、②“高点数医療機関に対する行政指導”からの回避、③患者さんの経済的負担の軽減、の3点からである。

開業医にとって、上記①と②は経営努力をしなければならぬが、リスクを背負い込まないようにしなければならない日常の宿命の問題点である。したがって、日本臨床皮膚科医会の会員へのアンケート結果(2005年12月14日付、小澤、根本私信)で、ジ剤を使用している勤務医が約22%であったのに対し、開業医は約75%を占めたのは当然の結果である。

厚労省は総医療費抑制のために、ジ剤の使用を推奨し、さらにそれを促進するために「代替調剤」実施を勧めようとしている。しかし、処方する側の医師がなかなか応じないのは、後発品への単なる偏見ではないことを知ってほしい。

(1) 薬価改定のたびに価格が大きく低減し、今や必ずしも薬価差益は後発品が多いとは限らない。

(2) 会社の利益が上らない薬品は、突然製造中止することがある。

(3) 薬疹の検査に必要な薬剤成分が素早く提供できない。

(4) 先発品と同じ効能といえない場合がある：
内服剤でも外用剤でも、前医で無効であったジ剤

と同じ効能の先発品に替えて有効であった症例を経験している。

(5) 先発品と同じ製剤と思えないことがある：
ジ剤外用剤による接触皮膚炎が疑われた症例に、入手困難であったために先発品メーカーから得ることができた同一といわれる製品の as is、主要薬剤、基材など手にしえた物質でパッチテストを行った。その結果、ジ剤の as is だけに陽性反応がみられたことがある。

(6) 薬剤の製造工程、作業環境および保存状態は万全なのだろうか？

(7) 外用剤の容器不備：軟膏のチューブが破れ、患者さんに「いいかげんな薬」とお叱りをうけたことがある。

テレビや新聞の広告で、ジ剤の良い点をアピールしているのをみかけるが、先発品と同じと断言でき、製造工程も信頼でき、そのうえ安価で、さらに薬価差があるとすれば誰もが処方するであろう。しかし、そうあってほしいと思う反面、ほとんどの医師がもっと多くのジ剤を使用するようになれば、長期間にわたり高額の開発コストをかけてきた先発品メーカーの経営を悪化させることになる。そうなれば、先発品製薬会社はコスト削減をはからねばならず、その結果日本発の新薬の開発が困難になり、それは長い目でみれば、日本の医療の荒廃につながるのではないかと危惧している。

* Masanori KASAMATSU, 〒455-0887 名古屋市港区福田 2-912 かさまつ皮膚科、理事長

** Morihide OHNO, 〒454-0922 名古屋市市中川区荒中町 220 大野皮膚科医院、院長